

千鳥

鈴木三重吉

青空文庫

千鳥の話は馬喰ばくろくの娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へ蓆むしろを敷いてしよんぼりと坐っている。干し列べた平莖ひらくきには、もはや糸筋ほどの日影もささぬ。洋服で丘を上あがってきたのは自分である。お長は例の泣きだしそうな目もとで自分を仰ぐ。親指と小指と、そして襷たすきがけの真似まねは初やがこと。その三人ともみんな留守だと手を振る。頤あごで奥を指して手枕ゆびざをするのは何のことか解らない。藁わらでたばねた髪ほつの解ほつれは、かき上げてもすぐまた顔に垂れ下る。

座敷へ上つても、誰も出てくるものがないから勢はずみがない。廊下へ出て、のこのこ離れの方へ行つてみる。麓ふもとの家で方々に白木綿を織るのが轡くつむし虫むしが鳴くように聞える。廊下には草花とこしの床とこしが女帯ほどの幅で長く続いている。二三種の花が咲いている。水仙の一と株に花床が尽きて、低い階段を拾うと、そこが六畳の中二階である。自分が記念に置いて往つた摺絵すりえが、そのままに仄ほのくら暗く壁に懸つている。これが目につくと、久しぶりで自分の家うちに帰つてきでもしたように懐なつかしくなる。床の上に、小さな花瓶に竜胆りんどうの花が四五本挿しである。夏二た月の逗とまり留りゆうの間、自分はこの花瓶に入り替りしおらしい花を絶やしたことがなかった。床の横の押入から、赤い縮緬ちりめんの帯上げのようなものが少しばかり食はみだ

している。ちよつと引つ張つてみるとすうと出る。どこまで出るかと続けて引つ張るとすらすらとすつかり出る。

自分はそれをいくつにも畳んでみたり、手の甲へ巻きつけたりしていじくる。後には頭から頤あごへ掛けて、冠かんむりの紐ひものように結んで、垂れ下つたところを握つたまま、立膝になつて、壁の摺絵を見つめる。「ネイシヨンス・ピクチュア」から抜いた絵である。女が白衣の胸にはさんだ一輪の花が、血のように滲にじんでいる。目を細くして見ていると、女はだんだん絵から抜けでて、自分の方へ近寄つてくるように思われる。

すると、いつの間にか、年若い一人の婦人が自分の後に坐っている。きちんとした嬢さである。しとやかに挨拶をする。自分はまごついで冠を解き捨てる。

婦人は微笑ほほえみながら、

「まあ、この間から毎日毎日お待ち申していたんですよ」という。

「こんな不自由な島ですから、ああはおつしやつてもとうとお出でくださらないのかもしれないと申しまして、しまいにはみんなで氣を落してしまいましたのでごぎいますよ」と、懐かしそうに言うのである。自分は狐にでもつままれたようであった。丘の上のひと一つ家の黄た昏そがれに、こんな思いも設けぬ女の人ひとのこりと現れて、さも親しい仲のように対してくる。

かつて見も知らねば、どこの誰という見当もつかぬ。自分はただもじもじと帶上を畳んでいたが、やっと、

「おばさんもみんな留守なんだそうですね」とはじめて口を聞く。

「あの、今日は午過ぎから、みんなで大根を引きに行ったんですの」

「どの畠へ出てるんですか。——私ちよつと行ってみましょう」

「いいえ、もうただ今お長をやりましたから大騒ぎをして帰っていらつしやいますわ」

「さつき私は誰もいないのだと思つて、一人でずんずんこへ上つてきたんです」と言つて、お長が手枕の真似をしたことを胸に浮べる。女の人は少し頭痛がしたので奥で寝^{やす}んでいたところ、お長が裏口へ廻つて、障子を叩いて起きてくれたのだと言う。

「もう何ともございません」と伏し目になる。起きて着物をちやんとして出てきたものらしい。ややあつて、

「あなたはこの節は少しはおよろしい方でございますか」と聞く。自分の事は何でもすっかり知つているような口ぶりである。

「どうもやっぱり頭がはきはきしません。じつは一年休学することにしたんです」

「そうでございますつてね。小母さんは毎日あなたの事ばかり案じていらつしやるんです

よ。今度またこちらへお出でになることになりましたから、どんなにお喜びでしたかしれません。……考えると不思議な御縁ですわね」

「妙なものですね。この夏はどうしたことからでしたか、ふとこちらへ避暑に来る気になったんですが、——私はあまり人のざわつくところは厭だもんですから。——その代り宿屋なんぞのないということははじめから承知の上なんでしたけれど、さあ、船から上つてそこらの家へ頼うちんでみると、はたしてみんな断つてしまふでしょう。困ったんですよ」

婦人は微笑む。

「それでしかたがないもんだから、とうとのこのご役場へやっつて行つたんです。くるくる坊主ですねこの村長は」

「ええ、ほほほ」

「そしたらあの人が親切に心配してくれたんです」

「そしてこの小母さんに、私は母というものがないんだから、こんな家へ置いてもらつたらいいのがつて、そうおつしやつたのですつてね」

「そうでしたかなあ。とにかく小母さんを一と目見るとから、何かしら懐しくなつたんです」

「そんなにおっしやったものですから、小母さんもしおらしい方だと思って、お世話をする気になったんですって」

「私は今では小母さんが生みの親のように思われるんですよ。私の家にいたって何だか旅の下宿にでもいるような気がするんですもの」

「小母さんも青木さんはあたしの内証の子なんだかもしれないなんて冗談をおっしやるんですよ」

「あ、いつか小母さんが指へ傷をしたというのはもう直ったのですか」

「ええただナイフでちよつと切ったばかりなんですから」

二人はこのような話をしながら待っている。築地の根を馬の鈴が下りてゆく。馬を引く女が唄を歌う。

障子しょうじを開けてみると、麓ふもとの蜜柑畑サササが更紗さらさらの模様のようにである。白手拭を被った女たちがちらちらとその中を動く。蜜柑を積んだ馬が四五匹続いて出る。やはり女が引いている。向いの、縞しまのようになった山畠けむりに烟が一筋揚っている。焰ほのおがぼろぼろと光る。烟は斜に広がって、末は夕方の色と溶けてゆく。

女の人も自分のそばへ寄って等しく外を見る。山畠のあちらこちらを馬が下りる。馬は

犬よりも小さい。首を出してみると、庭の松の木のはずれから、海が黒く湛たえている。影のごとき漁船りようせんが後先になつて続々帰る。近い干潟ひがたの灰白い砂の上に、黒豆を零こぼしたやうなのは、鳥の群が下りているのであろうか。女の人の教える方を見れば、青松葉をしたたか背負つた頬冠りの男が、とことこと畦道あぜみちを通る。間もなくこちらを背にして、道について斜に折れると思うと、その男はもはや、ただ大きな松葉の塊かたまりへ股引の足が二本下つたばかりのものとなつて動いている。松葉の色がみるみる黒くなる。それが蜜柑畑の向うへはいつてしまうと、しばらく近くには行くものの影が絶える。谷間谷間の黒みから、だんだんとこちらへ迫つてくる黄昏たそがれの色を、急がしい機はたの音が招き寄せる。

「小母さんは何でこんなに遅いのですようね」と女の人は慰めるようにいう。あたりは見るとちに薄暗くなる。女の人がちよつと出て行つて、今度帰つて坐つた時には、向き合ひになつてももう面輪おもわが定かに見えない。

女の人は、立つて押入から竹洋灯ランプを取りだして、油を振つてみて、袂から紙を出して心を摘む。下へ置いた笠に何か書いた紙切れが喰つついていている。読んでみると章坊の手らしい幼い片仮名で、フジサンガマタナクと書いてある。

「あら」と女の人は恥かしそうに笑つてその紙を剥はがす。

「章ちゃんがこんな悪戯いたずらをするんですわ。嘘ですよ、みんな」と打消すようにいう。

「何の事なんです、これは」

「ほほほ」

「フジサンというのは」

「あたしでございます」

「ああ、お藤さんとおっしゃるんですか」

「はい」と藤さんは微笑みながら、立って押入れを探す。

藤さんという名はこうして知ったのである。

「そしてあなたが何でお泣きになったんです？」

「いいえ、嘘ですの、そんなことは」

「燐寸マッチを探していらつしやるんですか。私が持っています」

「あら、冗談なのでございますわ。あれは章ちゃんが……」と勘違えをしている。ポケット

トから燐寸を出して洋灯ともを点すと、

「まあ、恐れ入ります」と藤さんは坐る。灯とも火しびに見れば、油絵のような艶あでかな人である。

顔を少し赤らめている。

「あしが一番あん」と章坊が着物を引つ抱えて飛びだすと、入れ違いに小母さんがはいつてきて、シャツの上から着物を着せかけてくれる。

「さ、これをあげましょう」と下締したじめを解く。それを結んで小暗い風呂場から出てくると、藤さんが赤い裏の羽織ひろを披ひけて後へ廻る。

「そんなものを私に着せるのですか」

「でもほかにはないんですもの」と肩へかける。

「それでも洋服とは楽でがんしょうがの」と、初やが焜こんろを煽あおきながらいう。羽織は黄八丈である。藤さんのだということとは問わずとも別っている。

「着物が少し長いや。ほら、踵かかとがすつかり隠れる」と言うど、

「母さんのだもの」と炬燵こたつから章坊が言う。

「小母さんはこんなに背が高いのかなあ」

「なんの、あなたが少し低うなりなんしたのいの。病気をしなんすもんじゃけに」と初やが冗談ぶざんをいう。

「女は腰のところを下帯からで繫かけて着るんですから」と言つて、藤さんはそばから羽織の襟

を直してくれる。

「なぜそうするんでしょう」

「みんなそうするんですわ。おや、羽織に紐がございませんわね」

「いいえけっこう」というと、初やが、

「まあ、お二人で仲のいいこと」と言いさま、きゆうにばたばたとはげしく煽ぎだす。

「まあ」と藤さんは赤い顔をしている。

蜜柑箱を墨で塗って、底へ丸い穴を開けたのへ、筒抜けの罐詰の殻からを嵌はめて、それを踏台の上に乗せて、上から風呂敷をかけると、それが章坊の写真機である。

「またみんなを玩おもちゃ具にするのかい」と小母さんが笑う。この細工は床屋の寅吉に泣きついてさせたのだという。章坊は、

「兄さんを写してあげるんだから、よう、炬燵から出てくださいよ」と甘えるように言うかと思うと、

「じきです。じき写ります」と、まじめに写真やのつもりでいる。

「兄さんは炬燵へ当ってる方がうまく写るよ」

「だって姉さんが邪魔をしてるんだもの」と風呂敷の中へ頭を入れる。

「姉さんぐずぐずしてると背中が写ってしまいますよ」

「はいはい」と、藤さんは笑いながら自分の隣へ移る。

「兄さん、もつと真つ直ぐ」

「私の顔が見えるの？」

「見えるとも、そら笑つてらあ。やあい」

がたがたと箱を揺ぶる。やがてもつたいらしく身構えをして、

「はい、写しますよ」とこちらを見詰める。

「あら、目を閉つぶつてるものがあるものか。……さ、写りますよ。……ただ今。はいありがとう」と手に持った厚紙の蓋ふたを鐘詰かねづめへ被かぶせると、箱の中から板切れを出して、それを提さげて、得意になつて押入の前へ行く。

「章ちゃん、もう夜はそんな押入なぞへはいるもんじやないよ」と小母さんが止めると、

「だつてお母さん。写真を薬でよくするんじやありませんか」と泣きそうな顔をする。

「それよりか写真屋さん。一昨日おとといかしら写したあたしの写真はいつできるんですか」と藤さんが問う。小母さんも、「私ももう五六度写つたはずだがねえ。いつできるんだろう。」

まだ一枚もくれないのね」と突つ込む。それから小母さんは、向いの地方へ渡つて章坊と写真を撮つた話をする。章坊は、

「今度は電話だ」と言つて、二つの板紙ボールがみの筒を持つて出てくる。筒の底には紙が張つてあつて、長い青糸が真ん中を繋いでいる。勧工場かんこうばで買ったのださうである。章坊は片方の筒を自分に持たせて、しばらく何かしら言つて、

「ね、解つたでしよう?」という。

「ああ、解つたよ」といい加減まに間を合あわしておくど、

「万歳」と言つてにこにこして飛んできて、藤さんを除ぞけて自分の隣りへあたる。

「よ。姉さんもだよ」という。

「よしよし」

「何の事なんです」と藤さんは微笑む。

「今電話がかかりましてね、……」

「ああ今言つちやいけないんだよ兄さん。あれは姉さんには言われなんだから」

「何でしょう。人が悪いのね」

このようなことを言つているところへ、初やが狐きつね 饅頭まんじゅうを買つて帰つてくる。小提ぢ

ようちん
灯を消すと、蠟燭から白い煙がふわふわと揚る。

「奥さま、今度の狐もやっぱり似とりますわいの」と言つてげらげらと初やが笑う。

饅頭を食べながら話を聞くと、この饅頭屋の店先には、娘に化けて手拭を被つた張子の狐が立たせてあつた。その狐の顔がその家の若い女房におかしいほどそっくりなので、この近在で評判になつた。女房の方では少しもそんなことは知らないでいたが、先達ある馬方が、饅頭の借りを払つたとか払わないとかでその女房に口論をしかけて、

「ええ、この狐め」

「何でわしが狐かい」

「狐じゃい。知らんのか。鏡を出してこの招牌と較べてみい。間抜けめ」

こういつたようなことから、後で女房が亭主に話すと、亭主はこの辺では珍らしい捌けた男なんだそうで、それは今ごろ始つた話じゃないんだ。己の家の饅頭がなぜこんなに名高いのだと思う、などとちやらかすので、そんならお前さんはもう早くから人の悪口も聞いていたのかと問えば、うん、と言つてすましている。女房はわつと泣きだして、それを今日まで平気でいたお前が恨めしい。畢竟わしをばかにしているからだ。もうこれぎり実家へ帰つて死んでしまふと言つて、箆筒から着物などを引つ張りだす。やがて二人

で大立廻りをやって、女房は髪を乱して向いの船頭の家へ逃げこむやら、とうと面倒なことになったが、とにかく船頭が仲裁して、お前たちも、元を尋ねると踊りの晩に袖を引き合いからの夫妻めおとじやないか。さあ、仲直りに二人で踊れよおい、と五合ばかり取ってきた。その時の女房との条約もとづに基いて、店の狐は翌日から姿を隠してしまった。ほかの狐が箱にはいつて城下の人形屋から来て、ふたたび店に立ったのはついこの間の事である。今度のは大きさもいたち颯ぐらいしかないし、顔も少し趣を変えるように注文したのであろうけれど、「なんぼどのような狐をこしらえ持ってきたところで、お孝ちゃん顔が元のままじゃどうしてもだめがんですわいの。へへへへ」と、初やは、やっと廻りくどい話を切つてあちらへ立つ。藤さんはもう先達も聞いたから、今夜はそんなにおかしくはないと言つたけれど、それでもやはりはじめてのように笑つていた。

話が途絶とだえる。藤さんは章坊が蒲団へ落したあん館を手の平へ拾う。影法師が壁に写つている。頭が動く。やがてそれがきちんと横向きに落ちつくと、自分は目口眉毛を心でつける。小母さんの臂うでがちよいちよい写る。かんざし簪で髪の中を搔かいているのである。

裏では初やが米を搗つく。

自分は小母さんたちと床を列べて座敷へ寝る。

枕が大きくて柔らかいから嬉しいと言うと、この夏にはうっかりしていたが、あんな枕では頭に悪いからと小母さんがいう。藤さんはこの枕を急いで拵えてから、あだに十日あまりを待ち暮したと話す。

藤さんは小母さんの蒲団の裾すそを叩いて、それから自分のを叩く。肩のところへ坐つて夜着の袖をも押えてくれる。自分は何だか胸苦しいような気がする。やがてあちらで藤さんが帯を解く気色けいしがする。章坊は早く小さな躰いびきになる。自分は何とはなしに寝入ってしまうのが惜しい。

「ね、小母さん」とふたたび話しかける。

「え？」と、小母さんは閉じていた目を開ける。

「あの、いったい藤さんはどうした人なんです？」と聞くと、

「なぜ？」と言う。

聞いてみると、この家うちが江田島の官舎にいた時に、藤さんの家と隣り合せだったのだそうである。まだ章坊も貰もらわない、ずっと先の事であったし、小母さんは大変に藤さんを可愛がって、後には夜も家へ帰すよりか自分の側へ泊らせる方が多いくらいにしていた。は

じめそこへ移つてきた翌あくの日であつたか、藤さんがふと境の扇骨木垣かなめがきの上から顔を出して、「小母さま。今日は」と物を言いかけたのが元であつた。藤さんが七つ八つにすぎぬころであつたろう。それから四五年してこの主人が亡くなつて、小母さんはこちらへ住居をきめることになつた。別れの時には藤さんも小母さんも泣いた。藤さんはその後いつまでも小母さん小母さんと恋しがつて、今日まで月に一二度、手紙を欠かしたことはない。藤さんの家は今佐世保にあるのだそうで、お父さんは大佐だそうである。

「それでは佐世保からはるばる来たんですか」

「いいえ、あの娘こだけは二た月ばかり前から、この対岸むかいにいるんです。あなたでも同じおんなですけれど、こんなになると、情合はまつたく本当の親子と変りませんわ」

「それだのにこの夏には、あの人の話はちよつとも出ませんでしたね」

「そうでしたかね。おや、そうだったかしら」

「そして私の事はもうすつかりあの人に話してあるようですね」

「ふふそれはあなた、家では何とかいうとすぐあなたの話が出るんですから、あの人だつて、まだ見もしないうちからもう青木さん青木さんと言つて、お出でになつてもまるで兄きょうだい妹いかなぞのようきょうだいに思つているんですもの」と章坊の枕を直してやる。

「さつきもね、初やから、お嬢さんは存外人に恥かしがらない方だとか言ってるかわれたんでしょう。そうするとね、だってあの方はもうよくお知り申してる方なんだものってそう言うんですよ。それでいてまだずいぶん子供のようところがあるんですからね」

「私だって何だか、はじめて会った人のようにとは思えませんよ。——まだ永く逗留するんですか」

「あの娘ですか。そうですね……いったい今度こちらへまいったというのが……」

しまいを欠といっしよに言つて、枕へ手を添えたと見ると、小母さんはその後を言わないで、それなりふいと眉毛のあたりまで埋まりこんでしまふ。しばらく待つてみても容易にふたたび顔を出さない。蒲団の更紗へ有明行灯の灯が朧にさして赤い花の模様が目よりとじている。

何だか煮えきらない。藤さんが今度来たのはどうしたのだというのか。何かおもしろくない事情があるのであろうか。小母さんは何とか言いかけてひよつくり黙ってしまった。藤さんはどうして九月から家を出ているのか。この対岸のどんな人のところにいるのであろう。

池へ山水の落ちるのが幽かに聞える。小母さんはいつしか顔を出してすやすやと眠っている。大根を引くので疲れたのかもしれない。小母さんの静かな寝顔をじっと見ていると、自分もだんだんに瞼が重くなる。

千鳥の話は一と夜明け。

自分は中二階で長い手紙を書いている。藤さんが、

「兄さん」と言っではいつてくる。

「あのただ今船頭が行李を持ってまいりましたよ」という。

「あれは私のです」と言っただまま、やっぱりずんと書いて行く。

「それはそうですけれど、どうせこちらへ運ばなければならぬのでしょう?」

「ええ」

「ではこの押入には、下の方はあたしのも物が少しばかりはいつておりますから、あなたは当分の段だけで我慢してくださいましな」

「……………」

「ねえ」

「ええ」

「まあ一心になつていらつしやるんだわ」という。

ちようど一と区切りついたから向きなおる。藤さんは少し離れて膝を突いている。

「お召し物も来たんでしよう？——では早くお着換えなさいましな。女の着物なんか召しておかしいわ」と微笑む。自分は笑つて、袖を翳^{かぎ}してみる。

「さつきね」と、藤さんは袂^{たもと}へ手を入れて火鉢の方へ来る。

「これごらんなさい」と、袂^{たもと}の紅絹裏^{もみ}の間から取り出したのは、茎^{くき}の長い一輪の白い花である。

「このごろこんな花が」

「蒲公英^{たんぽぽ}ですか」と手に取る。

「どこで目つけたんです？ たつた一本咲いてたんですか」

「どうですか。さつき玉子を持つてきた女の子がくれてつたんですの。どこかの石垣に咲いていたんだそうです。初やがね、これはこのごろあんまり暖かいものだから、つい欺^{だま}されて出てきたんですって」

返した花を藤さんは指先でくるくる廻している。

「本当にもう春のようですね、こちらの気候は」

「暖いところですね」

自分は今もくと日のさした障子を見つめて、陽炎かげろうのような心持になる。

「私ただ今お邪魔じやございませんか」

「何がですか？」

「お手紙はお急ぎじゃないのですか」

「そうですね。——郵便の船は午ひるに出るんでしたね」

「ええ。ではあとですぐ行李をこちらへ運ばせますから」と、藤さんは張合がなさそうに立って行く。

「あ、この花は？」

「え？」と出口で振り向いて、

「それはあなたにおあげ申したのですわ」

藤さんが行ってしまったあとは何やら物足りないようである。たんぽぽを机の上に置く。手紙はもう書きたくない。藤さんがもう一度やってこないかと思う。ちぎった書き崩しを拾って、くちやくちやに揉んだのを披ひらげて、皺しわを延ばして畳んで、また披げて、今度は片

端から噛み切つては口の中で丸める。いつしかいろいろの夢を見はじめ。——自分は覚めていて夢を見る。夢と自分で名づけている。

馬の鈴が聞えてくる。女が謡うのが聞える。

ふと立つて廊下へ出る。藤さんが池のそばに踞んでいて、

「もうおすみになつて？」と声をかける。自分は半煮えのような返事をする。母屋の縁先で何匹かのカナリヤがやつきに囀り合っている。庭いっぱい黄色い日向は彼らが吐きだしているのかと思われる。

「ちよつといらつしてごらんさいな。小さな鮎かしらたくさんいますわ」と、藤さんは眩しそうにこちらを見る。

「だつて下駄がないじゃありませんか」

「あたしだつて足袋のままですわ」

自分もそれなり降りて花床を跨ぐ。はかなげに咲き残った、何とかいう花に裾が触れて、花弁の白いのがはらはらと散る。庭は一面に裏枯れた芝生である。離れの中二階の横に松が一叢生えている。女松の大きいのが二本ある。その中に小さな水の溜りがある。すべてこの宅地を開く時に自然のままを残したのである。

藤さんは、水のそばの、苔こけの被った石の上に踞すわんでいる。水ぎわにちらほらと三葉四葉ついた櫛はぜの実生えが、真赤な色に染っている。自分が近づけば、水の面が小砂を投げたように痺しびれを打つ。

「おや、みんな沈みました」と藤さんがいう。自分は、水を隔へだてて斜に向き合って芝生に踞む。手を延ばすなら、藤さんの膝に carousel して届くのである。水は薄黒く濁っていれど、藤さんの翳かげす袂たもとの色を宿している。自分の姿は黒く写って、松の幹の影に切られる。

「また浮きますよ」と藤さんがいう。指ゆびさすところをじっと見守っていると、底の水苔を味噌汁のように煽おだてて、幽かな色の、小さな鮎あなご子がむらむらと浮き上る。上へ出てくるにつれて、幻まぼろしから現うつつへ覚めるように、順々に小黒い色になる。しばらくいっしょに集ってじつとしていく。やがて片端から二三匹ずつ繰くりだして、列を作って、小早に日の当る方へと泳いで行く。ちらちらと腹を返すのがある。水の底には、泥を被かぶった水草の葉が、泥へ彫刻したようになっている。ややあつて、ふと、鮎あなご子の一隊が水の色とまぎれたと思うと、底の方を大きな黒いのがうじやうじやと通る。

「大きなものもいるんですね。あ、あそこに」と指すと、

「どこに」と藤さんが聞く。しかしそれは写っている影であった。鮎あなご子はやつぱり小さく

上の方に行く。自分は足元の松葉をかき寄せて投げつける。鮎子は響のごとくに沈んで、争い乱れて味噌汁へ逃げこんでしまう。

藤さんが笑う。

手飼の白鳩が五六羽、離れの屋根のあたりから羽音を立てて芝生へ下りる。

「あの鴝かもめは綺麗な鳥ですね」と藤さんがいう。

「あれは鳩じゃありませんか」

「ほほほほ、あれじゃないんですの。あたしね、ほほほほ」

「どうしたんです？」

「いいえ、あたしとんでもないことを思いだしたんですわ」と一人で微笑む。

「何を？」

「何でもないことです。——先せんだって達あたしがこちらへ渡ってくる途中でね、鴝が一匹、小さな枝切れへ棲とまって、波の上をふわりふわりしていたんですの。ちようど学校などにある標本を流したようでしたわ」

自分は気がついたように、海の方を見わたす。はるかか果てに地方しがたの山が薄うつすら見える。小島の蔭に鳥貝を取る船がひと群むれ帆を聯つらねている。

「ね、鳩が餌を拾うでしょう」と藤さんがいう。

「芝生に何か落ちてるんでしょうか」

「あたしがさつき撒まいておいたんです。いつでもあそこへ餌を撒くんです」

「あ、あれは足をどうかしてるようですね」

初やがすたすたとやってくる。紺こんの絆はんでん天てんの上に前垂をしめて、丸く脹ふくれている。

「お嬢さん」

「何？」

「いいや、男のお嬢さんじゃわいの」

「まあ。今お着換えなさるんだわ」

「私はどうした」

「冗談かたは置いて、あなたは蟹かにを食べなんしたか」

「いつ？」

「ほほほ、鴟とのような話ね。——蟹を召しあがれば買ってくるつもりなの？」

「ええ、はあ買うたるのよの。午に煮ようかと思うんでがんさ。はあじきにお午じゃけに。

——食べなんしたことがんすのかいの」

「食べるけど、あれは厄やっかい介かいなばかりでしかたがないや」

「おいしいものですね」

「それはもうがんすえの。それにこのごろは月がないころじゃけになおさうまいんでがんすわいの。いいえ、ほんとでがんすて。月夜にはの、あれが自分の影に怖れてびくびくするけに痩せるんでがんすといの」

村の水天宮様の御威徳を説く時の顔つきである。

「ほほほ」

「おもしろいな、それは」

「そんなら食べなんすか」

「食べるよ」

「じゃ、よかった」と、またあちらへすたすたと、草履かかとの踵かかとへ短い影法師を引いて行く。

鳩は少しも人に怖れぬ。

自分は外へ出てみたくなる。藤さんは一人で座敷で縫物をしている。いっしょに浜の方へでも出てみぬかと誘うと、

「そうですね」と、につこりしたが、何だか躑躅ちゅうちよの色が見える。二人で行ったとて誰が咎とがめるものかと思う。

「だってあんまりですから」と、ややあつて言う。

「何が」

「でもたった今これをはじめたばかりですから」

「ついでに仕上げてしまいたいのですか」

「いいえ、そうじゃないのですけど、何だか小母さんにすまないから。——あたし行きたいんですけど」

「では行けばいいじゃありませんか」

「そんなことはかまわないんですけどね、あたしこちらへまいってから、いつも鬱ふさいばかりいて、何一つろくにお手伝いしたことないんですよ」

自分は立膝をして、物尺ものさしを持って針山の針をこつこつ叩いて、順々に少しづつ引こませていたが、ふと叩きすぎて、一本の針を頭も見えないようにしてしまう。幸にそれはちよつとした糸がついていたので、ぐいとその糸を引くと、針はすらりと抜ける。

「もう一と月からなるのですのに、ずっと私そんなでしたものですから、今日は気分は

いいし、私の方からそう言って、これを言いつかつたのですのに」

「かまわないや、そんなことは」

「だって女はそうも……」と、針に糸を通す。

自分は素直に立って、独りで玄関へ下りたが、何だか張合が抜けたようでした。しばらくぼんやりと敷居に立っている。

と、

「兄さん」と藤さんが出てくる。

「あそこに水天宮さまが見えてるでしょう。あそこの浜辺に綺麗な貝殻きれいながたくさんありますから、拾っていらつしやいな」という。そんなに勢はずまないのだけれど、もうよそうとも言えないので、干し列べた平莖の中をぶらぶらと出て行く。

五六歩すると藤さんがまた呼びかける。

「あなたお背せなに綿屑わたくずかしら喰くっていますよ」

「どこに？」

「もつと下」

「このへんですか」

「いいえ」

「大きいのですか」

「あ、もうちよつと上」と言い言い出てきて取つてくれる。真綿の切れに赤い絹糸の絡からんだのが喰つついていたのである。藤さんはそれを手で揉もみながら、

「いいお天気ですね」という。いつしよに行つてみたいという念がそぶりに表われている。門を出しなに振り返ると、藤さんはまだうろうろと立っている。

「お早くお帰りなさいましな」

「ええ」と自分は後の事は何んにも知らずに、ステッキを振り廻しながらとことこと出て行つたけれど、二人はついにこれが永き別れとなつたのである。

もちろんこの時には、借りた着物はもう着換えていた。着換えるまで自分は何の気もなしにいたけれど、こうして島の宿りに客となつて、女の人の着物を借りて着たのかと思うと、脱ぐ段になつて一種の艶えんな感じが起つた。何だかもう少し着ていたいようにも思われた。そして、しばらく羽織の赤い裏の裏返つたのを見守つた。自分の家などでは、こんな花やかな着物を脱ぎ捨ててあることはついに見られない。姉は十一で死んだ。その後家じゆうに赤い切れなぞは切れつ端もあつたことはない。自分の家は冬枯れの野のようだとつ

くづくそう思う。そのうちにふと蛇の脱殻ぬけがらが念頭に浮んだ。蛇は自分の皮を脱いで、脱いだ皮を何と見るであろうかと、とんでもないことを考えだした時、初やがやってきて、着換えた着物を持って行った。

今自分は、その蛇が皿を巻いたような丘の小道をぐるぐると下りて行く。一曲りずつ下りるにつれて、女の歌っているのがおいおいに鮮かに聞き取れる。

「ねんねしなされ、おやすみなされ。鶏とりがないたら起きなされ」と歌う。艶つややかな声である。

「おきて往いなんせ、東が白む。館やかた々やかたの鶏かたが啼く」と丘を下りてしまうと、歌うのは角の豆腐屋のお仙である。すべてこの島の女はよく唄を歌う。機はたを織るにも畠を打つにも、舟を漕ぐにも馬を曳くにも、働く時にはいつも歌う。朝から晩まで歌っている。行くところに歌の揚あがらぬことがあれば、そこには若い女がないのである。若い女はみんな歌う。そしてお仙なぞは一番うまい組のようである。

お仙は外に背中を向けて豆を挽ひいている。野袴をつけた若者が二人、畠の道具を門口へ転がしたまま、黒くろくすぶ燻くすぶりの竈かまどの前に踞しゃがんで煙草を喫のんでいる。破れた唐紙の陰には、大黒頭巾を着た爺さんが、火鉢を抱えこんで、人形のように坐っている。真つ白い長い顎あごひ

髯げは、豆腐屋の爺さんには洒落しやれすぎたものである。

「おかしかしかし櫛の葉は白い。今の娘の齒は白い」

お仙は若い者がいるので得意になつて歌つている。家について曲ると、

「青木さんよう」と、呼び止める。人並よりよほど広い額に頭痛膏をべたべたと貼り塞ふさいでいる。昨ゆうべ夕の干潟の鳥のようである。

「昨日きんによう来きなんしたげなの。わしやちようど馬を換えに行つとりましての」と、手を休めて、

「乗りなんせい。今度のもおとなしゆうがんすわいの」と言つたかと思うと、またすぐに歌になる。

「親はたちが二十で子が二十一。どこで算用さんよが違ちがたやら」

「ようい、よい」と野袴はやの一人が囁ささす。

横の馬小屋を覗のぞいてみたが、中に馬はいなかつた。馬小屋のはずれから、道の片側を無い花果ちしゆくの木が長く続いている。自分はその影を踏んで行く。両方は一段低くなつた麦畠あはである。お仙の歌はおいおいに聞えなくなる。ふと藤さんの事が胸に浮んでくる。藤さんはもう一と月も逗留ぶらしているのだと言つた。そして毎日鬱ふさいでばかりいたと言つた。何か訳

があるのであろう。昨夜小母さんがにわか黙ってしまったのは、眠いからばかりではなかつたらしい。どういふことなのであろうかとしきりに考えてみる。

後から鈴の音が来る。自分はわが考えの中で鳴るのかと思う。前から藁を背負った男が来る。後で、

「ごめんなんせ」という。振り向くと、馬の鼻が肩のところに覗いている。小走りに百姓家の軒下へ避ける。そこには土間で機を織っている。小声で歌を謡っている。

「おおい」と言つて馬を曳いた男が立ちどまる。藁の男は足早に同じ軒下へ避ける。馬は通り抜ける。蜜柑を積んでいる。

と、

「まあ誰ぞいの」と機を織っていた女が甲走った声を立てる。藁の男が入口に立ち塞つて、自分を見て笑いながら、じりじりとあとしぎりをして、背中の藁を中へ押しこめているのである。

「暗いわいの」と女がいうと、

「ふふふ」と男は笑っている。打とけた仲かもしれない。

ふたたび藤さんの事を考えつつ行く。初やは事情を知っているかもしれぬ。あれに喋ら

せてみようかしらと思う。

このあたりはすべて漁師の住居である。赤ん坊を竹籠へ入れて、軒へぶらぶら釣り下げて、時々手を挙げて突きながら、網の破れをかがっている女房がある。縁先の蓆に広げた切芋へ、蠅が真つ黒に集つて、まるで蠅を干したようになっていいるのがある。だけれど、初やに聞くというのは、何だか、小母さんが言わないでいることを陰へ廻つて探るようである。聞くまい。知れる時には知れるのだ。自分はなぜこんなに藤さんの事を気にするのであろう。たんに好奇心というにすぎないのであろうか。

この時自分は、浜の堤の両側に背丈よりも高い枯薄が透間もなく生え続いた中を行く。浪がひたひたと石崖に当る。ほど経て横手からお長が白馬を曳いて上つてきた。何やら丸い物を運ぶのだと手真似で言つて、いっしょに行かぬかと言うのである。自分はついて行く気になる。馬の腹がざわざわと薄の葉を撫でる。

そこを出ると水天宮の社である。あとで考えると、このへんで引き返しさえしたらよかつたのに、自分はいつまでも馬の臀について、山島を五つも六つも越えて、とうとお長の行くところまで行つたのであつた。谷合いの島にお長の双た親と兄の常吉がいた。二三寸延びた麦の間の馬鈴薯を掘っていたのである。

「まあ、よう来てくれなんしたいの」と言ってみんなで喜ぶ。爺さんは顔じゆうを皺にし
て、

「わしらはあんたが往んなんしたあと、いつまでもあんたの事ばかり話していたんぞ」と
にこにこする。

「はあ死ぬまで会われんのかいと思うたに」と母親が言う。自分は小さい時の乳母にでも
会ったような心持がする。しばらくいろいろの話をする。

やがて双た親は掘りはじめる。枯れ萎れた茎の根へ、ぐいと一と鍬くわ入れて引き起すと、
その中にちらりと猿の臀のような色が覗く。茎を掴んで引き抜くと、下に芋が赤く重なっ
てついている。常吉はうしろからほきほきとそれをもぎ取って畚ふこへ入れる。一と畚溜れば
うんと引つ抱えて、畦くろに放した馬の両腹の、網の袋へうつしこむ。馬は畚へ影を投げて笹
の葉を喰っている。自分はお長と並んで、畚の隅の蓆の上で煙草を吹かす。双た親は鍬を
休めるたびごとには自分の方を向いて話しをする。お長も時々袖を引いて手真似で話す。

沖の鳥貝を搔く船を指して、どの船も帆を三つずつ横向きにかけている。両端から二本の
碇いかりづな 網を延しているゆえ、帆に風を孕はらんでも船は動かない。帆が張っているから碇網は
弛ゆるまぬ。鳥貝は日に干して俵に詰めるのだなどと言う。浪が畚の下崖に砕ける。日向ひなたが

もくもくと頭の髪に浸みる。

やがて常吉の若い嫁が、赤い馬を引いてやってくる。その馬が豆腐屋のであった。嫁も掘る。自分も掘つてみたいと言つたけれど、着物がよごれるからだめだと言つて母親が聞かない。嫁は唄を謡う。母親も小声で謡う。謡えぬお長は俯うづつ伏ふして蓆むしろの端むしをつっている。常吉が手を叩くと、お長は立つて、白馬を引いて行く。網の袋には馬鈴薯がいっぱいになつている。白馬が帰つてくると、嫁の赤馬が出て行く。赤が帰ると白が出る。

「父とうやん、はあ止やめにしなんせ」と常吉が鉢はちまき巻まきを取つた時には、もう馬の影も地に写らなかつた。自分は何時間おつたか知らぬ。鳥貝の白帆もとくにいなくなつている。

「旦那は先い往いんなんせ。お初やんが尋ねに生まれように」と母親がいう。自分は初めて貝殻の事を思いだして、そこそこに水天宮のところまで帰ってくる。

夕日がはるか向いの島蔭に沈みかかっている。貝殻はもう止そうかしらと思つたが、何だか気がすまぬゆえ、せめて三つ四つばかりでもと思つて干潟へ下りる。嫁の皿たもとという貝殻がたくさんころがつている。拾いだすとなかなか止められない。とうと片たもとつ方たもとの袂たもとへおおかたいっぱいになるまで拾う。

上へ上つてみると、自分の歩いた下駄あしこの跡あとが、居坐つた二つの漁りようせん船せんの間まにうねすね

と二筋に続いている。帰ったら藤さんが一番に出てきて、まあ何をしておいでになつたんですと言うであろう。そして貝殻を玄関へうつしだすと、おやたくさんにまあと言つて嬉しそうにするであろう。自分はそれをもうあつたことのように考え浮べながら、袂を抱えて小早に帰る。豆腐屋の前まで来ると、お仙が門口でカンテラへ油をさしていた。

丘を上る途中で、今朝買わせたばかりの下駄なのに、ぶすり前鼻緒が切れる。元が安物で脆弱ひよわいからであろうけれど、初やなぞに言わせると、何か厭なことがある前徴である。しかたがないから、片足袋ぬいで、半分跣足はだしになる。

家へ帰ると、戸口から藤さん呼びかけて、しばらく玄関にうろついていたが、何の返事も無い。もう一度高く呼んで、今度は小母さんと言つてみたがやっぱり返事がない。家じゆうがしんとしていて、自分の声のはいつて行く跡が見えるようである。勝手へ廻つて初やを呼んでも初やもない。変だと思ひながら、あり合せの下駄を提さげて井戸端へ出て、足を洗おうとしていると、誰かしら障子の内でしくしくと啜すすり泣きをしている。障子を開けてみると章坊である。足を投げ出してしょんぼりしている。

「どうしたんだ」と問えど、返事もしないでただ涙を払う。

「お母さんはいないの？」と言えば顔を横に振る。

「いるの?」と言えどやつぱり横に振る。

「どうしたんだ。姉さんはどこへ行ったんだい?」と聞くと、章坊は涙の目を見張って、
「姉さんはもう帰っちゃったんだもの」と泣きだすのである。

「おや、いつ?」

「よその伯父さんが連れに来たんだ」

「どんな伯父さんが」

「よその伯父さんだよ」と涙を啜る。

自分は深い谷底へ一人取残されたような心持がする。藤さんはにわかまに荷物を纏まとめて帰って行ったというのである。その伯父さんといふのはだ**い**ぶ年の入いつた、鼻の先に痘痕あばたがちよぼちよぼある人だという。小母さんも初やもいっしょに隣村の埠頭場はとぼまでついて行ったのだそうである。夕方の船はこの村からは出ないのである。初やは大きな風呂敷包みを背負って行った。も少し先のことだという。その伯父さんは章坊が学校から帰ったらもう来ていたというのである。自分は藤さんの周辺の事情が、いろいろに廻り灯籠とうろうの影のように想像の中を廻る。今埠頭場まで駈けつけたら、船はまだ出ないうちかもしれない。隣村の真ん中までは二十町ぐら**い**はあろうけれど、どこかの百姓馬を飛ばせば訳はない。何

だか会つて一と言別れがしたいようである。このままでは物足りない。欺だまされでもしたよ
うにあつけない。駈ひけつてみようかしらと思うけれど、考えると、その伴れに來た人間
に顔を見られるのが厭である。何だか無性に人相のよくない人間のようない気がしてならな
い。それが怪しげな眼つきをしてじろじろと白眼にらみでもすると厭である。また船が出た後
であつては間抜けている。そして小母さんに自分などは來なくてもいいのにと思われると
何だかきまりが悪い。こう思つて決心がつかない。しばらくぼんやりと立つて、その伯父
さんの顔を考えてみる。これまで見たことのある厭な意地くねの悪い顔をいろいろ取りだ
して、白髪かつらの鬢かづらの下へ嵌はめて、鼻へ痘痕あはたを振つてみる。

やがて自分はこのこのこと物置の方へ行つて、そこから稲妻の形に山へついた切道を、す
たすたと片跣かたはだし足のままで駈け上る。高みに立てば沖がずっと見えるのである。そして、
隣村の埠頭場から出る帆があれば、それが藤さんの船だと思つたからである。上あがれるだけ
一足でも高く、境めぐに繞らす竹垣の根まで、雑木の中をむりやりに上つて、小松の幹つかまを捉え
て息を吐く。

白帆が見える。池のごとくに澄みきつた黄昏たそがれの海に、白帆が一つ、動くともなく浮い
ている。藤さんの船に違いない。帆のない船はみんな漁りょうせん船である。藤さんが何か考え

こんで斜はすかいに坐つているところが想われる。伴れに来た人は何にも言わないで、鼻の痘痕を小指の爪でせせくつて坐つているような気がする。藤さんはどんな心持がしているであろう。どういうことからこんな不意に伴れて行かれたのであろうか。小母さんのところに一と月もいたのはどうしたゆえであらうかと、いろんなことが一度に考えられて、物足りないような、いらだたしい心持がする。船から隣村の岸までは、目で見てもここからこの前の岸までよりかはるかに遠いけれど、まだ一里と乗りだしてはいない。自分が畑に永くいさえしなかつたら、少くとも藤さんが出かけるところへなりと帰ってきたであらうに。それともなぜはじめから出て行くのを止さなかつたらう。いっしょにいる間は別に何とも思わなかつたけれど、こうなつてみれば、自分は何かしらあなたをいじらしく思うとくらは言つておきたかつたような気がする。このままで永く別れてしまうのは何だか物足りない。自分がどんな気にいるかは藤さんは知つてはいまい。別れた後は元の知らぬ人と考えているように思つていてくれるは張合がない。自分は何だかお前さんの事が案じられてならないのである。

このあたりの見渡しは、この時のみは何やら意味があるようであつた。暮れて行く空や水や、ありやなしやの小島の影や、山や蜜柑畑や、森や家々や、目に見るものがごとごと

く、藤さんの白帆が私語く言葉を取り取りに自分に伝えていような気がする。

と、ふと思わぬところにもう一つ白帆がある。かなたの山の曲り角に、靄に薄れて白帆が行く。目の迷いかと眸を凝らしたが、やつぱり帆である。しかし藤さんの船はぜひと前からの白帆と定めたい。遠い分はよく見えぬ。そして、間もなく靄の中に消えてしまうのである。よく見えて永く消えないのが藤さんの船でなければならぬ。

はらはらと風もないのに松葉が降る。方々の機音が遠くの虫を聞くようである。自分は足もとのわが宿を見下す。宿は小鳥の逃げた空籠のようである。離れの屋根には木の葉が一面に積つて朽ちている。物置の屋根裏で鳩がぼうぼうと啼いている。目の前の枯枝から女郎蜘蛛が下る。手を上げて祓い落そうとすると、蜘蛛はすらすらと枝へ帰る。この時袂の貝殻ががさと鳴る。今までとんと忘れていたけれど、もうこの貝殻も持っていたつつまらないと思つて、一つずつ出しては離れの屋根を目がけて投げつける。屋根へ届くのは一つもない。みんな途中へ落ちる。落ちて木の葉が幽かに鳴る。今のは何とも答がなかったと思うと、しばらくして思いだしたようにばさというのがある。目を閉じて横の方へうんと投げて、どの見当で音がするか当ててみる。しなればするまで投げる。しまいは三つも四つも握つてむちやくちやに投げる。とうとう袂の底には、からからの藻草の切

れと小砂とが残つたばかりである。

ふたたび白帆を見る。藤さんのはいつまでも一つとところにいる。遠くの分はもう亡くなっている。そして、近く岸の薄すすきのはずれにこちらへ帰る帆がまた一つある。どこから帰つたのかとはじめは訝いぶかしむ。そのうちに、これは一番はじめのがこちらへ近づいたのではあるまいかと疑う。みるみる岸に近くなる。それでは藤さんの船だと思つたのは、こちらへ帰る船ではなかつたらうか。今の藤さんの船は、靄もの中なかのがこちらへ出てきたのではあるまいか。自分はわが説あざけが嘲あざけりの中に退けられたように不快を感じる。もしかなたの帆も同じくこちらへ帰るのだとすると、実際の藤さんの船はどれであろう。あちらへ出るのには今の場合帆が利かぬわけである。けれども帆のない船であちらへ行くのは一つもない。右から左へ、左から右へと隈くまなく探しても一つもない。自分は気がいらだつてくる。それでは先に靄の中へ隠れたのが藤さんのだ。そしてもう山を曲つて、今は地方じがたの岬を望んで走っているのである。それに極きめねば収まりがつかない。むりでもそれに違ちがいない、と権けん柄んべいずくで自説つらぬを貫つらぬいて、こそそと山を下おりはじめる。

下りる途中に、先に投げた貝殻が道へぼつぼつ落ちてゐる。綺麗きれいな貝殻だから、未練にもまた拾つて行きたくなる。あるだけは残らず拾つたけれどやつと、片手に充ちるほどし

かない。

下りてみると章坊が淋しそうに山羊の檻を覗いて立っている。

「兄さんどこへ行ったの」と聞く。

「おい、貝殻をやるうか章坊」というと、素気なくいらないう言う。

私は不意に帰らねばならぬことと相なり候。わけは後でお聞きなさることと存候。容易にはまたとお目もじも叶うまじと存ぜられ候。あなたさまはいつまでも私のお兄さまにておわし候。静かに御養生なされ候ようお祈り申しあげ候。おものも申さで立ち候こと本意なき限りに存じまいらせ候。なにとぞお許しくだされたく候。

これは足を洗いながら自分が胸の中で書いた手紙である。そして実際にこんな手紙が残してあるかもしれないと思う。出ようとする間ぎわに、藤さんはとんとんと離れへはいつて行つて、急いで一と筆さらさらと書く。母家で藤さんと呼ぶ。はいと言いいい、あらあらかしくと書きおさめて、硯の蓋を重しに置いて出て行く。——自分が藤さんなら、こんな時にはぜひとも何とか書き残しておく。行つてみれば実際何か机の上に残してあるかもしれないという気がする。

しかしやつぱりそんな手紙はなかった。

けれども、ふと机の抽斗ひきだしを開けてみると、中から思わぬ物が出てきた。緋ひの紋羽二重に紅絹裏もみのついた、一尺八寸の襦袢じゆばんの片袖が、八つに畳んで抽斗の奥に突っ込んであった。もとより始めは奇怪なことだと合点が行かなかつた。別に証拠しやうこといつてはないのだから、それが、藤さんがひそかに自分に残した形見であるとは容易に信じられるわけもない。しかし抽斗は今朝初やに掃除をさせて、行李から出した物を自分で納めたのである。袖はそれより後に誰かが入れたものだ。そしてこの袖は藤さんのに相違はない。小母さんや初やや、そんな二三十年前の若い女に今ごろこんな花やかな物があるはずがない。はたして藤さんが入れたのだとは断言できぬけれど、しかしほかのものがどう間違つたつてこんな物を自分の抽斗へ入れこむわけがない。藤さんのしたことに極きまっている。そうすればたまたうっかり無意味で入れたのではない。心あつて自分にくれたのである。そう推定したつてむりとは言えまい。自分は袖を翳かきして何だかほろりとなつた。

しかし自分は藤さんについてはついにこれだけしか知らないのである。ああして不意に帰つたのはどういう訳であつたのか、それさえとうと聞かないづくであつた。その後どこにどうしているのか、それも知らない。何にも知らない。

というところと合点が行かぬかもしれぬけれど、それは自分がわざわざ心配してこん

な風にしてしまったのである。千鳥の話が大切なからである。千鳥の話とは、唾のお長の手枕にはじまって、絵に描いた女が自分に近よって、狐が鼬ほどになって、更紗の蒲団の花が淀んで、鮒が沈んで針が埋まって、下駄の緒が切れて女郎蜘蛛が下って、それから机の抽斗から片袖が出た、その二日の記憶である。自分は袖を膝の上に載せたまま、暗くなるまでじっと坐っているいろいろな思いにくれた末、一番しまいにこう考えた。話はただこの二日で終らなければおもしろくない。跡へ尾を曳いてはもうつまらないと考えた。ある西の国の小島の宿りにて、名を藤さんという若い女に会った。女は水よりも淡き二日の語らいに、片袖を形見に残して知らぬ間にいなくなってしまった。去ってどうしたのか分らぬ。それでたくさんである。何事も二日に現れた以外に聞かぬ方がいい。もしやよけいなことを聞いたりして、千鳥の話の中の彼女に少しでも傷がついては惜しいわけである。こう思ったから自分はその夕方、小母さんや初やなどに会うのが気になった。二人が何とか藤さんの身の上を語って、千鳥の話壊しはしまいかと気がもめた。

小母さんは帰ってくるやいなや、

「あなたお腹がすいたでしょう。私気になって急いで帰ったのでしたけど」と、初やお菜の指図をして、

「これから当分は何だかさびしいでしょうね。まったく不意にこんなことになったのですよ」と、そろそろ何か言いだしそうであったから、自分はすぐ、

「あの豆腐屋の親爺さんは、どういう気であんなに髯ひげを生やしているんでしょう。長い髯ですぬ」と言つて、話の芽を枯らしてしまつた。

それ以来小母さんたちがちよつとでも藤さんの事を言いだすと、自分はたちまち二日の記憶を抱いて遁にげて行くのであつた。どんな場合でもすぐ遁げる。どうしても遁げられな
い時には、一生懸命にほかのことを心の中で考え続けて、話は少しも耳へ入れぬようにしていた。後には、小母さんも藤さんの事は先方から避けていっさい自分の前では言わなくなつた。初やも言い含められでもしたのか、妙に藤さんの名さえも口に出さなかつた。二人で何とか考へての事かもしれないと思つたが、そんなことはどうでもよかつた。聞かされさえしなければいいのである。その後小母さんからよこす手紙にも、いつでも自分がいたころの事をあれこれ回想していながら、今に藤さんの話は垢ほども書いてはこない。

以来永く藤さんの事は少しも思わない。よく思うのは思うけれど、それは藤さんを思うのではない。千鳥の話の中の藤さんを思うのである。今でも時々あの袖を出してみる事がある。寝つかれぬ宵などにはかならず出してみる。この袖を見るには夜も更けぬとおも

しろくない。更けて自分は袖の両方の角を摘つまんで、腕を斜に挙げて灯ともし火の前に釣つるす。赤い袖の色に灯影が浸みわたって、真中に焰が曇るとき、自分はそぞろに千鳥の話の中へはいって、藤さんといっしよに活動写真のように動く。自分の芝居を自分で見るのである。始めから終りまで千鳥の話くわを詳しく見てしまうまでは、翳かげす両手のくたぶれるのも知らぬ。袖を畳むとこう思う。この袂たもとの中に、十七八の藤さんと二十ばかりの自分とが、いつまでも老いずに封じてあるのだと思う。藤さんは現在どこでどうしていてもかまわぬ。自分の藤さんは袂の中の藤さんである。藤さんはいつでもありありとこの中に見ることができる。

千鳥千鳥とよくいうのは、その紋羽二重の紋柄である。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集18 鈴木三重吉 森田草平集」集英社

1969（昭和44）年9月12日発行

初出：「ホトトギス」

1906（明治39）年5月

入力：土屋隆

校正：小林繁雄

2005年10月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

千鳥

鈴木三重吉

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>